

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		此嘉大吾決着となる春灯し	夜むすから真昼しすかに竹婦人		新秋や絵文字でつづる艶書かな	塩こうじ粒のかと取れ今朝の秋		熱帯夜仕込む秘伝のソースかな	秋の夜や男の恋も整いぬ

清記用紙(番号2)

(所写)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	バル巡るバスクの美食秋ちかし	玄閑に椅子ひとつ置く終戦日		サイダーや全細胞を喝采す	嘘でしょう顔の涼しき舞妓はん	細筆の艶色立秋美の図		立秋や赤い影のびゆく同じ朝	立秋の七色インク偽装中

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
水玉を弾き転がすキャベツの葉		ふぶ漬けをかきこみしより祭囃子		団扇手に奈良公園の灯りかな	立秋や灯しひとつの消えし湯屋	とも	天仰ぐ我を忘れて盆踊り		灼けついた列車熱ごと駅に入る

清記用紙(番号4)

(関洋子) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
墓参り母の歩みに合わせけり	夏休み夫婦だけ行く休暇村		エアコンの嫌いな妻の冷たい目		秋立つやささらさらさわと風の立つ		赤裸裸に時は進みて秋立ちぬ	せき らら	立秋のニンニク抜き餃子かな

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
母の心の御霊屋開く秋初め	みたまや	初秋やすぐにすつろり湯浴み後	あ	盃蘭盆会ゆが家め仏帰宅せり	や ほこけまじく	夏の果小さきむくろで遊ぶ猫	ち	避暑求め行くふる里に避難指示	靴紐を結び直すや今朝の秋

清記用紙(番号6)

(服部梅句)写

1	青田波広がり路鳥は動かざる
2	夏草や蜘蛛塚語る声涼し
3	腰窓の文机墨色の立秋
4	くり上がり知る子の凜々し夏休み
5	船頭はおニテールの夏の雲
6	新涼や一度で通る針の穴
7	
8	
9	
10	

清記用紙(番号7)

(平筆)

(写)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				制服を脱いで少女は熟女帯魚	夕暮しの川面を巡る鬼やんま	ラジオからの絶叫はまり蚊遣香	花菱の庭よりこ東千日紅	八月の雨染み渡る千枚田	「永河期」といふ名の世代酷暑来る

1	熟すまで待つてバナナを剥きにけり
2	電柱の陰 一本分の避暑地
3	かなかなしと日暮れ切なし山の宿
4	蟬しぐれ土に還りし骸あり
5	夏旅行両手にワインサイゼリヤ
6	果てしなき海岸線や夏の旅
7	
8	
9	
10	

清記用紙(番号9)

(近藤和卓) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	白服の杖で向き指す 好子好子 父耶		立秋のわが身を 超へる影法師		仙の奥州小紋宵涼し		語り部を真直ぐ見 つめる原爆忌	執筆に集中を欠く 残暑かな	送り火の護摩木に 記す願いかな

1	やそとせ にほん
2	八十年の遠キ八月の日本に
3	アイスクリーム舐めて哲学的思考
4	立秋や絵葉書えらぶ手をとめて
5	
6	町並は寂しからずや百日紅
7	下町や家並 ^{やなみ} にぎわす青竹簾
8	すす
9	涼しきやズズッと蕎麦を啜る音
10	それぞれの夏へ分岐の京都駅

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
立秋や湧雲ゆきて空高く	わきぐも	力投も虚し涙の夏終る		人倒す気候で玄月つ稲穂かな		サーファーに青の海あり空のあり		去る村を峠で眺む晩夏行	二坪の庭を賑はす水遊び

清記用紙(番号 12.)

(レヤぼん)

(写)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			秋 立つや ビスト ールの 目の 記憶 み	永 遠の 賛否 両論 原爆 心	適 当の 禪 一丁 の 源 暑 かな	鈴 れと 共に 山下 る 秋 苗	立秋 の 雨 沙 面 を 解 き 放 つ	とう き が の 心 に 又 結 み つ う ざ い 奴	ア ス フ ア ルト 陽 火 揺 れ る 猛 暑 か な

清記用紙(番号 13)

(ひろし

) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	冷奴うんと自分を甘やかす		立秋やシトラス系からムスクの香	立秋や雁 ^{ガン} 皮紙 ^{かわ} に染む墨 ^{すみ} の色		亜 ^ア 熱 ^{ネツ} 帯 ^{タイ} 気 ^キ 候 ^{コウ} 夜明 ^{ヨミ} けの秋立 ^{あきたち} てり	秋たちぬ五山に採らぐと又かな		姪 ^{めい} 子 ^こ の成長 ^{せいしょう} 微笑 ^{みえう} む墓 ^{はか} 参 ^{まゐ} り

清記用紙(番号 14)

(鮫島しょうん) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				危うけな少女の鎖骨秋はじめ	信長の返事短し春灯し	赤青と業因映す戎橋	今日の秋とおりがかりの近江富士	翔平の一発暑気を払いけり	鳥声に夜明け知りたる帰省かな

清記用紙(番号 15)

(福田光弥) 写

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
				出始めの桃の堅きや野の香り	ひぐらしや妹と見た再放送	とりあへずビール荷ほどき終へぬまま	立秋や請われたように雨降らす	均等に鮎の塩焼きドラム缶	立秋や電池切れたる吾子眠る

清記用紙(番号 11)

(米田よし) 写

1	立秋の木漏れ日流す大和川
2	君の嘘解毒としてのソーダ水
3	四条涼み看板のない筈店 ほうき
4	立秋や朝から茶漬け啜りさリ
5	雪溪の風穴 ふうけつ 暫し身にはらむ
6	立秋や朝のテラスにダイジリン
7	
8	
9	
10	

1	いさゞくし
2	水切りの山菊に比む登んだ水
3	夏の夕よ見つむ理由なし
4	
5	燈花会の火映して浮見堂上
6	ソフトクリークやるりと落ける軒しナラ
7	よぶらう
8	脇道の恋あぐぬ信号油照
9	
10	夜の秋妻に罪なる梅酒の香

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
			小頂を せめ 見 み ぐ夏霧青き江	柔術と在りし看板春の雷	伊吹山飛蝗 飛ば とびたち街遠し		墨磨 い ば三置間にも秋立ちぬ	寺を継ぐ笠置サイダーほの甘し	立秋や夫の并当肉おおめ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
八月やクルーズ船の白さかな	参道の氷の旗に釣られ行く		八月の六日九日空仰ぐ		ポツポツと線香花火のひとりごと		遠近 あちこち の家族の集心墓参かな		睡蓮 スイレン の咲くだけ咲いて赤は閑

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		路地表や揺れぬ風鈴日に踊る	目から塩吹くかもしれぬ炎天下		水頭の恵み虹立つ暴れ川	ブカブカの歌生まれた街の溽暑		白玉を小さい匙で抄ひをり	鮎食べて故郷の山河想い馳せ

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
翡翠の羽音水面を穿ちけり	炎昼の背筋正しき女かな		真 ^{まこと} つすぐな人 ^{ひと} 生き辛し立葵	緑香花火おしまい際 ^{ぎは} の匂いかな		梅花 ^{めい} 染の流氷に函足浸しあり	どの声 ^{こゑ} が身内か庭の蟬の殻		秋立つや煙の香る商店街